



近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ

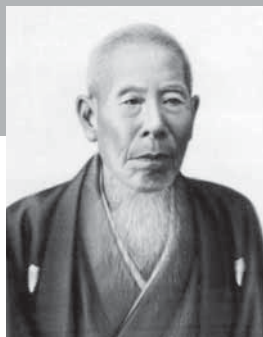
005

公共事業の父、湯の口ため池の築造（一八二三～一九〇七）

遠山弥二兵衛

とおやまやべえ

その昔、山鹿市の三玉地区では水不足に悩み、日照りの年には米がとれず村人は大変苦しんでいた。地域の役人だった遠山弥二兵衛は、そのような苦境にあえぐ村人を救うために、大きなため池をつくることを思い立ち、幾多の苦難を乗り越えて遂に五十万トンもの水をためることが出来る「湯の口のため池」を完成させた。これにより、蒲生地区をはじめ、御宇田・方保田・古閑・中村・日置・白石などの各地域が恩恵を受け、新しい水田が七十六ヘクタールほど開発され、多くの村人の生活が豊かになった。

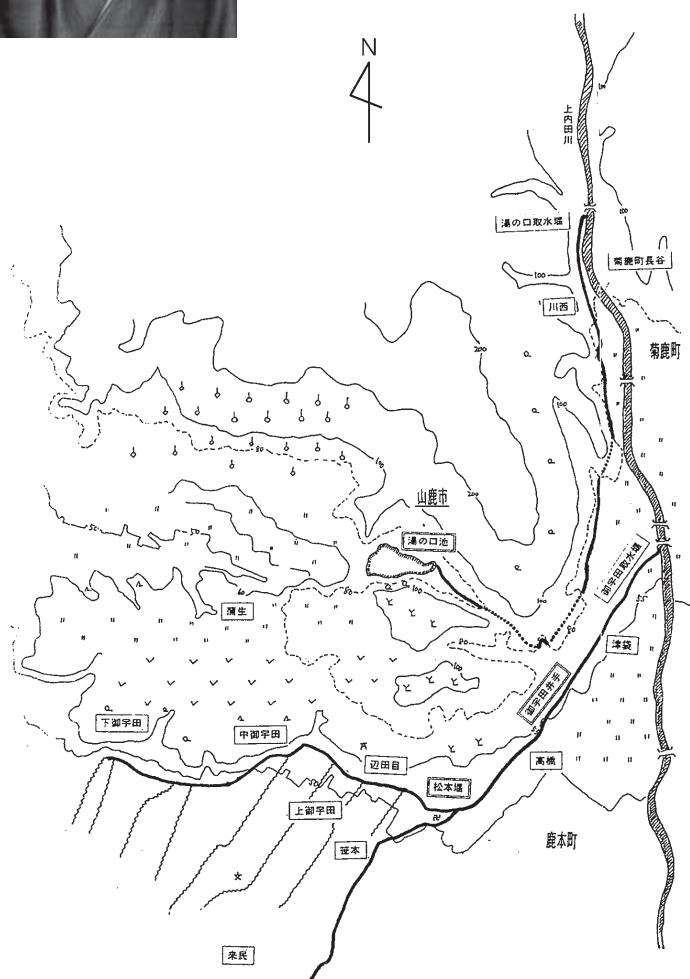


公共事業の父

～湯の口ため池の築造

遠山弥二兵衛
TOOYAMA YAZIBEE 1823~1907

TOOYAMA YAZIBEE 1823~1907



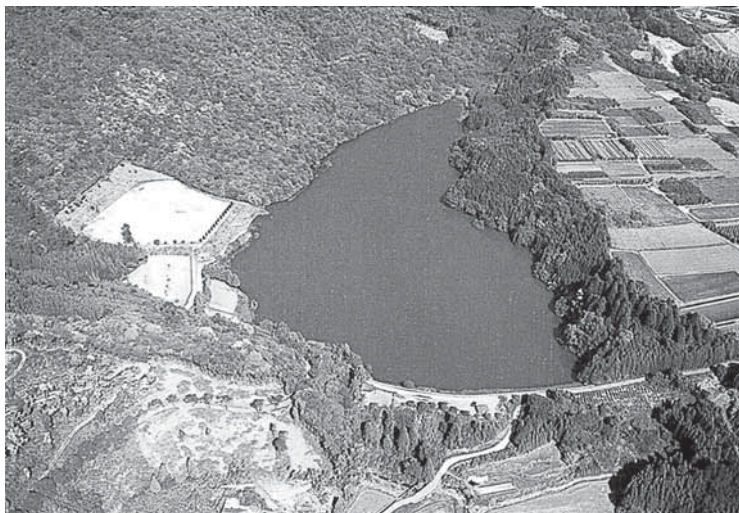
湯の口ため池周辺地図

湯の口ため池とは・・・

湯の口ため池は、山鹿市の三玉小学校区内にあります。左の図のほぼ中央部に「湯の口池」と書いてあるところが、その場所になります。図の右上に位置する菊鹿町の湯の口取水堰しゅすいせきから「湯の口池」まで続く実線と点線で記してあるところが水路で、水を引いて、ため池にためるような形になっています。

池の形は、東に行くほど幅が狭くなっている東西に長い大きなため池です。西側がため池の堤防になっており、堤防側から水を下流の水田に流すような形になっています。

堤防の長さは百六十八メートル、高さ十六メートルほどで、五十万トンもの水をためることができます。熊本県内のため池では宇土の立岡池に次ぐ大きさではないかといわれるぐらい大きなため池です。



湯の口ため池全景

工事をされた期間は、安政二年（一八五五）から安政四年（一八五七）までで、今から約百五十年ほど前です。このため池ができたおかげで、数十町（一町は約一ヘクタール）の新しい田が開田されて、数百町にわたる水田に水がいきわたるようになったそうです。

このため池の大きな特徴は、直接降り注ぐ雨水をためているだけではなく、上流の川から水を引っぱってきて水をためているということです。菊鹿の上内田川に取水口があり、約三キロの水路があります。上内田川流域の人々に迷惑がかからないように水田に水が不必要な秋から春にかけて水を引き、春から秋にかけて水を使うので、季節によってため池の水の量が違います。

水不足に苦しむ農民

遠山弥二兵衛が中村手永に惣庄屋として赴任してきた頃の村は、水が乏しかったために大変苦しい生活を余儀なくされていました。それは、水田を作っても、用水が乏しいためにすぐに干上がってしまった、稲を植えることができて水がなくなるために、田んぼに干割れができて干上がってしまい、米がとれないことが多かったからです。そのために、納める年貢米が足りずに、藩からの「下し米」という形で救い米があったほどだそうです。村の人々は、米がとれない分を山の薪取りや日雇いの仕事をして、何とか生計を立てていたようです。

水不足に苦しむ人々は、何とか水を確保しようと、雨水を堤にためて使っていました。水はどうしても足りなくなり、米を収穫することがなかなかできませんでした。その上、壊れた堤を修理することもできない状態で、ますます苦しい生活を送っていました。

このような農民の苦しんでいる姿を見た遠山弥二兵衛は、農民を何とか救おうと、周辺の土地の様子を調べて、蒲生村の湯の口に新たに大きな堤を作ることを考え、藩に申し出て許可を得ることができました。しかし、工事は大変難しく、また、水をどこから引いてくるのかという問題もありました。

弥二兵衛は、村人を使うことは耕作の支障となることや、工事が丁寧に行われるように考えて、すべて日雇夫で工事をすることにしました。また、水は上内田川から引いてくることに決めましたが、これまで水を使っていた人たちに迷惑がかからないように、秋から春にかけての、水田に水が必要ないときだけ水を引くように約束をして、関係する農民を説得することができました。しかし、そのために大きなため池が必要となり、その水圧に耐えられるような強い堤防を築かなければならなくなりました。弥二兵衛

は、このような問題にもくじけることなくぶつかっていった、問題を解決していったのです。

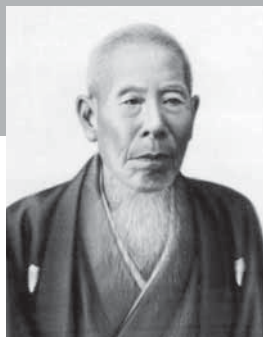
遠山弥二兵衛は、周辺の地域の方々との調和を図りながら、もめ事を起こさないように工夫することで、この大きな事業を進めることができたのでした。

ちょっとコラム

●熊本の飢饉の様子

小作農家はいずれも年貢が足らずして、牛馬、家財を売り、もとより糧物は残らぬように払うて、上納しても、たらずして、借りて納めんとすれども貸す人なし、とやかく延引すれば、一々会所に呼出して、しほりからげて責むれども、もと出来ぬものなれば、致すべき用もなし、しほりからけにあいながらは、才覚に参ることもならずして、なお延引すれば、日々にしめかたは手いたくなりて、どうにも堪忍ならずして、二、三日のうちにきつと納めますと、偽りていましめをのがれ、途中にて淵川に身を投じて死ぬものあり、首をくくって死ぬものあり、又宿元に帰りて、腹を切って死ぬものあり、それはそれは言語に述べられぬようにて。さりながら死ぬる者はそれきりにて苦をはなれてよけれども、あとに残りたる老母や女房、幼い子供が身は、さてさて悲しいことじゃ、亭主は死ぬる。明日よりの糧物はなく、これもまた首をくくろうやもしれず。

永田日出男著「放牛の風景」より、一部引用



公共事業の父

～湯の口ため池の築造

遠山弥二兵衛

TOOYAMA YAZIBEE 1823～1907

村人に分かってもらうために

水田での米作りが厳しい村の様子を見ながら、どうやって水を確保するかが弥二兵衛の一番の課題でした。そこで、村の様子や地形を見て回ったり、村のお年寄りと話したりする中から、ため池を造る場所として、現在の湯の口ため池がある場所を選びました。

しかし、この場所にため池を造り、水をためると、

一、堤が壊れた場合は、下の集落に水害が起き、ものすごく大きな被害が出る。

一、堤を造る費用を村人が出さなければならぬ。

一、自分たちの畑仕事の労働力を堤の労働に取られてしまうかもしれない。

と、いうようなことから、村人たちは、堤を造ることに反対していました。また、北側は日岡山、南側は台地になっているのですが、周辺の地域に降った雨水だけでは、堤を満水にできる水量にはならないと言われていて、ため池を造ることがそれまで実現しませんでした。

工事をしてため池を造れば、改善されるだろうということは分かっているのですが、なかなか実際にはそこまで工事ができず、どうしたら工事ができるかと、弥二兵衛は苦心しました。

その中で、まずは村人を説得するために、

一、工事をきちんとして水害が起きないようにすること

一、労働力やお金については、村人たちに負担をかけないこと

などを考えながら、工事の計画を立てました。
お金に関しては、中村手永会所にお願ひし、手永からお金を出してもらおうようにして、村人にはお金を出させないということを、まず最初に村人たちに話し、約束をしました。工事に使う竹は、藩の山から切り出しました。また、材料の石は、菊鹿町の長谷川

ちょっとコラム

●湯の口ため池が造られた当時の一両



(表) 天保小判 (裏)

手永から負担してもらった費用は、5000両だったといわれています。

地区から切って運んできたのではないかと考えられています。同じ藩で、同じ時期に造られた通潤橋の建設では、周辺の村々からお金を集めて、労働力も使っています。
湯の口ため池が造られた場所は、加藤清正公が見立てていた用地で、入り口は狭くなっている、西側の現在の堤防があるところをせき止めれば、水がためられるということは、前から言われていました。

難工事につとむ

工事は、「上内田川からため池までの水路づくり」と「ため池づくり」と「ため池から田畑までの用水路づくり」の三つが行われました。

水路づくりは、苦難の連続でした。全長約三キロメートルのこの水路は、曲がりくねっているだけでなく、そのうち三五十メートルは山をくり貫いてトンネルを掘らなければならませんでした。道具は、クワやノミしかなかった時代です。で、水が流れるようにするには大変な苦勞がありました。いたるところで、堅い岩石にはばまれ、工事中断の寸前に追い込まれましたが弥二兵衛は、石工や人夫を監督しながら励まし、炭で石を焼かせて岩石を割り削らせるなどして、筆舌に尽くしがたい苦心のすえ、ようやくこの難工事を完成させました。

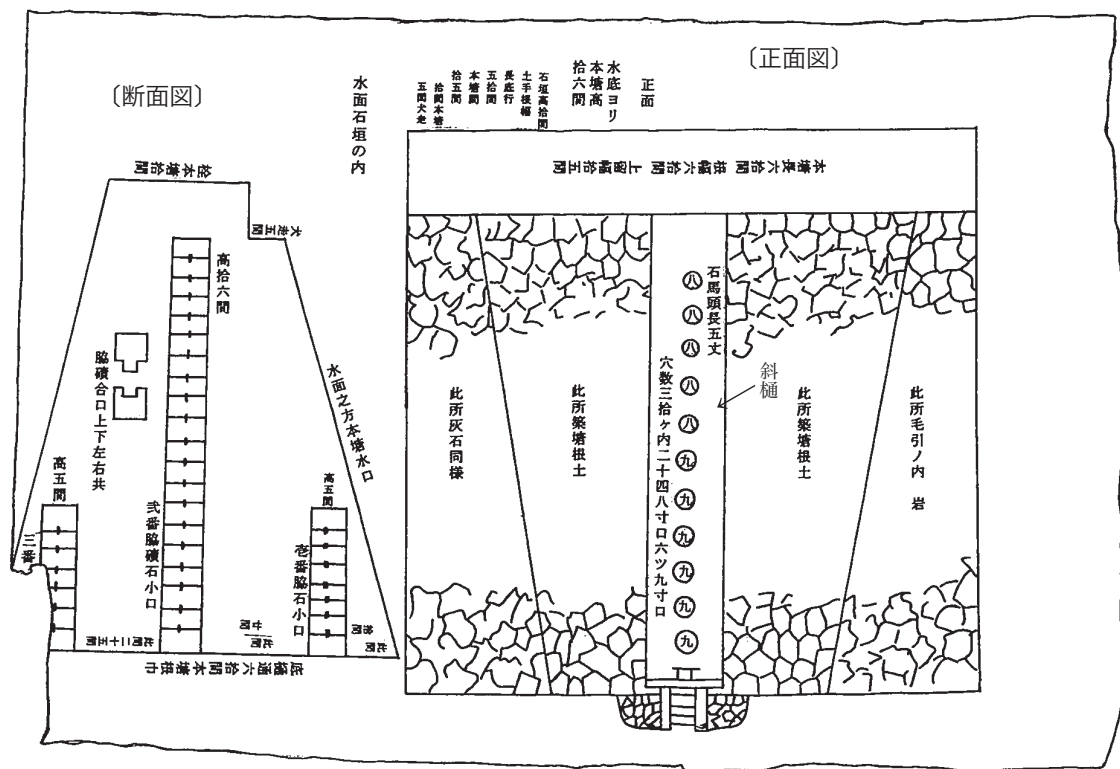
ため池づくりにあたっては、この地方の人々が大石の利用に慣れていなかったため、八代郡の干拓・大水路などを手がけた高田手永古麓村（現八代市）の山鹿茂次左門を招いて、石工工事の責任者となりました。茂次左門は、最高の技術を駆使し、石工や人夫たちを励ましながらかこの工事の指揮にあたりました。

ため池から下流の田畑に水を送るための用水路は全部で三本造られました。この用水路により、畑や荒地を水田化することができ、水田の面積を飛躍的に増やすことができました。

このようにしてできあがった湯の口のため池は、東西に約五三十メートル、南北に約二十メートル、堤防の高さ約三十メートル、総貯水量五十万トンの堂々たるため池となりました。いかなる干ばつにも用水が不足することはありませんでした。

堤防のつくり

ため池の設計は、文書「工事設計其他」に示されており石積の様子などが墨で描かれています。



堤防を正面から見た図面と横から見た図面

図面「湯ノ口ため池工事設計其他」



公共事業の父

～湯の口ため池の築造

遠山弥二兵衛

TOOYAMA YAZIBEE 1823～1907

右側に描かれている図面が堤防を正面から、つまり池の内側から見たものです。いくつもの○印が真ん中に書いてありますが、これが斜樋で、上から順に栓を抜いて水を出す構造になっています。一番上の八寸の所から、下の九寸まで全部で三十の穴があったようです。

左側に描かれている図面のような形になっているのが堤防を横から見た図面です。中心の真中に高さ十六間（一間は約一・八メートル）の石の堰があり、その左右にも小さな堰があります。外から見れば土だけで固めてある堤防に見えますが、中は三層の石垣状の構造になっています。一番下の底を水の通路「底樋」が一つ通っています。それから「水面之方本塘水口」と書かれてあるところに、斜めに樋が通っているという構造になっています。この図面にある設計で、実際に工事が行われています。

左下の写真は、平成の改修工事前に堤防の正面を内側から写したものです。改修により現在は、新しいコンクリート造りの排水口になっています。

弥二兵衛の当時の手紙には、「一度水が漏れたからといって、もう一度堤防に穴を掘って修理するわけにはいかない。そういうことをしなくてもいいように、例えば漆喰等で工夫をこらし、隙間ができたところには接着した。」と書かれています。堤防工事の所は特に気を使いました。手紙や当時の役人が記した記録には、工事責任者の山鹿茂次左工門と一緒に工事現場へ行き、絶対に失敗することがないように、どんな天気の時も現場に立って直接指導したことが記されています。水が漏れないようにするとともに、堤防が絶対に壊れないようにするため、細心の注意を払い、決意を持って工事にあたったことがよくうかがわれます。

弥二兵衛の決意

三年もかかってやっとため池が完成した日、弥二兵衛が決死の覚悟で最初の放水に臨んだことが語り継がれています。ついに堤防が完成し、いよいよ水門を開ける日が来ました。弥二兵衛は「もし、堤防が崩れるようなことがあったら村人に申し訳ない。この場で腹を切ってみなにお詫びしよう。」と決意し、刀を持って堤防の上に立っていました。さすがに苦心した堤防はびくともしませんでした。弥二兵衛本人が書いた「取扱趣意書」の中には、当日の心境として、夫婦共々この場で果てもよいとの決死の覚悟で臨んだと記されています。



堤防正面の写真
(ため池内側より平成の改修工事前に撮影)

ため池の恩恵

ため池の完成によって、蒲生地区をはじめ、御宇田・方保田・古閑・中村・日置・白石などの各村が恩恵を受け、新しい水田が七十六ヘクタールほど開発されたと言われています。

反あたり二俵だった収量が、五、六俵とれるようになりました。ため池ができる前と比べると、村には収入が増え、蔵が増え、床、瓦、家の造りも良くなり、村人の暮らしは豊かになりました。

用水路の清掃は年に一回、十一月月上旬に、村中総出で行われています。水路の水を活用して、自分で稲作に水を使っておられる方はもちろん、そうではない方々も、蒲生地区の方々、あるいは下流で水の恩恵を受けてこられた方々、また、その周辺地域の方々は、米を作る、作らないに関わらず、総出で清掃活動をされています。



約150年経った今現在も、現役のため池として水をたたえ、下流の水田に水を供給し続けています。

遠山祭について



遠山神社

三玉地区の人々は遠山弥二兵衛に感謝して、堤防の横に遠山神社をつくり、彰徳碑を立てました。地元の蒲生地区では、毎年四月四日にその遠山神社で遠山祭が営まれています。神事が行われ、地域の方々が大勢集まり、遠山氏の子孫の方を北九州から招待し、彼の功績を偲びながらお祭りが行われます。

約百五十年前の遠山氏の功績に対して、蒲生地区の方々がずっと昔の恩恵を忘れずに、自分たちの先代、先々代から、このような形で遠山氏への感謝の心を持ちながら、祭りを続けておられます。



遠山祭の様子

年表 History

一七六三年頃	各地にため池、用水路がつくられる。
一八二三年 (文政六年)	弥二兵衛八代郡竜峰村に生まれる。
一八四七年 (弘化四年)	八代郡高田会所取締役用懸に任命される。 (用懸＝責任者)
一八五三年 (嘉永六年)	中村手永惣庄屋兼代官になり、名を弥二兵衛と改めた。
一八五五年 (安政二年)	中村手永惣庄屋遠山弥二兵衛が、山鹿蒲生に湯の口ため池の工事を着工する。
一八五七年 (安政四年)	湯の口ため池工事が完成する。
一八五九年 (安政六年)	高田手永に所替えをされる。
一八六八年 (慶応四年)	願いを出し惣庄屋を辞任する。
一八七〇年 (明治三年)	名を弥二部(やじべえ)と改める。
一九〇七年 (明治四〇年)	遠山弥二兵衛亡くなる。

(注釈)

注1 中村手永

肥後と豊後の細川氏領で、郡と村の中間に置き、惣庄屋を長とした行政区画制度を手永制という。細川氏が肥後に入国すると、加藤氏時代の郷組制を手永制に切り替えた。山鹿郡には、中村手永山鹿手永の二つの手永があつた。

注2 惣庄屋

江戸時代、肥後藩の行政区であつた各手永を総括した地方役人の名称である。惣庄屋は山支配役、手付横目とともに手永三役と呼ばれ、地方では最も重要な役割を果たした。

注3 所替え

惣庄屋の任命については、江戸初期にはほとんど世襲であつたが、中期以降、身分の移動によつて世襲制が崩れ、所替えと呼ばれる転勤が頻繁に行われた。特に末期には家柄より本人の人格才能によつて広く登用され、各地の勧農、土木工事は飛躍的に進んだ。

参考文献

『山鹿市史』山鹿市編
『第七回山鹿文化歴史講演会 笠聡一郎先生講演録』山鹿市教育委員会編
『わたしたちの山鹿』山鹿市教育委員会編

あとがき

山鹿市教育長 田中 宏

山鹿市では「人づくり」を大きな理念・目標として行政に取り組んでいます。

そのような中、教育委員会では「近代の山鹿を築いた人たち」と題して、ふるさと山鹿の今日を築いた偉人を、子どもからお年寄りまで広く市民の方々に紹介し、顕彰できる冊子を発行しようと考えました。特に未来を担う子どもたちに、ふるさと山鹿にはこんなに立派な先輩がいたと言うことを知ってもらい、郷土を誇りに思い、将来に夢と希望を持ってもらいたい。このような願いを込めて発行したものです。なお、編集に当たっては、各学校の先生方に献身的にご協力をいただき心から感謝致します。

近代の山鹿を築いた人たち 005

公共事業の父 ～湯の口ため池の築造～ 遠山弥二兵衛

平成20年3月発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課

〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)

TEL 0968-43-1691

編集委員

委員長／中山 哲朗(鹿本中) 班 長／永尾 孝(三玉小)
委員／吉田 純子(山鹿中) 吉里 浩(鶴城中)
小山 睦子(三岳小) 檜崎 隆信(平小城小)
小原 節明(川辺小)